

桑波田 景信(くわはた・かげのぶ)先生

株式会社日音 代表取締役社長
一般社団法人日本音楽出版社協会 常務理事

1956年 生まれ

1980年 株式会社東京放送入社

1987年まで 制作現場、編成部

1987年～1990年 TBS インターナショナル(ニューヨーク)出向

1990年 帰国以降 「宇宙プロジェクト」

ドラマ「ずっとあなたが好きだった」

ドラマ「課長さんの厄年」などプロデューサー、

ディレクターを担当

1999年 株式会社日音へ出向～現在に至る

現 JASRAC(一般社団法人日本音楽著作権協会)理事

MPA(一般社団法人日本音楽出版社協会)常務理事



〈講義概要〉

株式会社日音代表取締役社長として音楽産業の発展に尽力する桑波田景信氏が、音楽出版ビジネスの構図と新たな展望について講義を行った。

講義ではまず、音楽出版社の仕事である楽曲制作・楽曲プロモーション・楽曲管理の3つについて分かりやすく解説。楽曲制作については、国内外の専属のプロの作曲家による「コライト作業」と呼ばれる制作方法や番組・ドラマ・映画とのタイアップによる制作方法を紹介し、長く愛される楽曲作りを目指し、作家と向き合いながら時間を掛けて生み出されていることを示した。続いて、楽曲の様々なプロモーション手段について紹介し、「番組やドラマ、映画にとって良い楽曲、愛される楽曲を制作することが大きな意味でプロモーションに繋がる」と解説した。また、楽曲管理について、音楽著作権使用料の内訳、国内曲と外国曲の管理方法等について説明し、複雑な著作権管理や資金の流れを分かりやすく示した。

さらに、アーティスト事務所、レコード会社、音楽出版社それぞれの機能についても詳しく解説し、立場や役割がボーダレスな時代になってきていることを示した。学生は、実態の見えにくい音楽出版ビジネスについて理解を深めるとともに、今後の音楽産業のあり方を考察する上で必要な知識と考え方を学んだ。

〈受講生の感想〉

Cowrite という作業がとても興味深かったです。プロの作曲家たちが1週間合宿して楽曲作りに励むということを知りました。また、映画化だけでは収益が得られないということで、DVD やテレビ放送、サウンドトラック CD などコンテンツを更に展開する必要性を感じました。日常的な娯楽からの徴収料が収益となるならば、カラオケ以外の新たな娯楽を生み出すことが音楽市場の拡大に繋がるのではないかと思います。

立命館大学・国際関係学部・3 回生

楽曲制作・楽曲プロモーション・楽曲管理という3つの仕事をなさっていると分かりました。特に印象的なのが“作家と向き合う”ということでした。Cowrite という作業を経て楽曲が作られていることを知り、驚きでした。また、よい曲を作るのに、作曲家やアーティストを含めてそれに関わるスタッフの方の血と汗と涙の結晶が詰まっているのだと感じ、そういったことを考えて音楽を聞いていきたいと思います。

立命館大学・産業社会学部・3 回生

アーティスト事務所、レコード会社、音楽出版社と音楽の制作者のそれぞれの役割について分かりやすく説明してもらえてよく理解できました。cowrite 作業やタイアップソングの制作について、作家やスタッフは長い時間をかけて曲作りを行い、「目の前の作品をいかに良いものにするか」ということをそれぞれが考えているという言葉が印象に残りました。

立命館大学・産業社会学部・3 回生

楽曲の制作や楽曲のプロモーションを行ったり、その楽曲を管理したりと1つの音楽にこのようなことが行われていることに驚いた。また、1つの音楽(楽曲)に対しての著作権などの様々な権利に対するサポートも必要になってくるので、ビジネスとしては大きいですが、その反面、手間も含めた著作者や歌手などといった人の権利もきちんと守っていかなければならないので、非常に複雑な業務だと思った。

立命館大学・法学部・4 回生

「cowrite」という制作者が協同で作業をし、様々なメロディー&トラックを作り、たくさんの中から選んで、ブラッシュアップしていくという流れがあることを初めて知りました。また、主にこういった制作/プロモーション/管理をしていて、音楽出版社のオールマイティさを改めて感じました。また、売れるコンテンツを制作する厳しさも知り、愛される音楽であることが重要であると知りました。

立命館大学・産業社会学部・2 回生

音楽出版社の仕事を説明いただきましたが、人に愛される曲を作っていくという姿勢に感銘を受けました。また、著作権に対する知識の重要性も改めて感じました。特に CD 媒体一枚において得られる収益の配分の内訳を見てみると、ひとつの作品を発表することにおいて非常に様々な権利や多くの人々が関わっているということを知りました。

立命館大学・産業社会学部・3 回生

